

## 批評と紹介

近刊近東史關係の入門書  
及び便覽

榎 一 雄

ソーズマチェーの回教東方史研究入門(J. Sauvaget, Introduction aux études de l'histoire de l'Orient musulman, Paris: Adrien-Maisonneuve, 1940—1946, 2me éd. 1947)を第一卷とするイスラム入門叢書(Initiation à l'Islam)の引續き第二卷の「イサマハット傳」(Tor. Andrae, Mahomet, sa vie et sa doctrine, trad. de l'allemand par J. Gauderyoy Demombyne, Paris 1940)第三卷「中央アジアトルコ民族史」(W. Barthold, Histoire des Turcs d'Asie centrale. Adaptation française par Mme Donstais, Paris, 1945)第四卷「ヤム語發達史序説」(H. Fleisch, Initiation du développement des langues sémitiques, Paris, 1945)第五卷「ソムニヤ史家」(J. Sauvaget, Historiens arabes, Paris, 1946)第八卷「イスラム研究」(J. Goldziher, Etudes

islamiques, 2 Vols, Paris, 未見)等を世に送つてゐる。就中、ソーズマチェーの回教東方史研究入門は、回教諸國史研究の基本的書誌として好評を博してゐるが、この叢書はイスラム研究の基礎たるべき諸事項について既刊の名著と書下しの新篇とを取まぜたもので、全體として一貫した組織と方針とをもつてゐるものではないやうである。

このフランスの叢書に次いで、イギリスのロンドン大學東洋アフリカ學校の歴史科のスタンの分擔執筆になる東洋史便覽(C. H. Philips, ed. by, Handbook of Oriental History, London, 1951)が出で、ルウイス(B. Lewis)教授がその近中東の部分を担当した。これはローマ字標記法・特殊用語解説・回曆西曆對照表等からなる文字通りの便覽で、専ら初學及び専門を異にする人々の利用に供することを目的としたものである。この便覽はこの近中東の部分の第一部とし、インド、パキスタン、東南アジア・支那・日本の四部がこれに續くのである。

一方、ハムブルグ大學のシュプラー(B. Spuler)教授の編輯にかゝる東洋學便覽(Handbuch der Orientalistik)がオランダのブリル書店から刊行せられ、一九五二年から今日までに次の五冊が出版されてゐる。

I. Band: Ägyptologie, 2. Abschnitt: Literatur, mit

Beiträgen von H. Brunner, H. Grapow, H. Kees, S. Morenz, E. Otto, S. Schott und J. Spiegel. 1952. VIII, 240 S.

III. Band : Semitistik, 1. Abschnitt, mit Beiträgen von C. Brockelmann, E. L. Dietrich, J. Fück, B. Spuler, 1953. VIII, 132 S.

III. Band : Semitistik, 2 u. 3. Abschnitt, mit Beiträgen von A. Baumstark, C. Brockelmann, J. Fück, M. Höfner, E. Littmann, A. Rüdiger, B. Spuler, 1954. VIII, 133—398 S.

VI. Band : Geschichte der Islamischen Länder, 1. Abschnitt; Die Chalifenzeit, von Bertold Spuler, 1952. VIII, 136 S., 6 Karten.

VI. Band : Geschichte der Islamischen Länder, 2. Abschnitt; Die Mongolenzeit, von Bertold Spuler, 1953. VIII, 124 S., 3 Karten.

私は残念ながらこの叢書の企畫の全貌を窺ふべき資料を手許に有たないので、第二巻が何に當てられてゐるのか、又、第五巻及びそれ以下があるのかどうかを知らないけれど、オリエンタリストイックといふ題名から察すると、最も廣い意味での東洋學の便覽として計畫されてゐるのであらう。この便

覽はそれぞれの項目について概説をめぐり、現在までに知られてゐることの大筋を説明することを重にしてゐる。従つて執筆者は必ずしも常にその項目についての専門家であるとは限らなす。例へばメソポタミア教授が回教國史を分擔してゐるのは然るべきことであるとしても、セム語形論・セム語發達史(第二巻第一冊)やアラビア語發達史(第三巻第一・三冊)も同教授の執筆で、専らプロットケルマン(C. Brockelmann)教授の所説に基づいて記述してゐる。この點はガイガー(W. Geiger)・クヌーレン(E. Kuhn)編纂の Grundriss der iranischen Philologie, Strassburg 1895—1906 や ヌーナーラー(G. Bühler)編纂の Grundriss der indo-arischen Philologie u. Altertumskunde, Strassburg & c., 1896—1935 などが専門中の専門家を動員し、十分な頁を與へてその蘊蓄を傾けさせたのとは、可成趣が違つてゐる。しかしこれらの Grundriss の記述が餘りに詳細であり、専門的であるのに對し、この便覽の記述は簡易平明であり、執筆者の獨特の説の陳述ではなく、今日學界に行はれてゐる諸説の摘要であるから、専門を異にするものも、一讀學界の標準的知識に通曉することが出来る。但し書誌は概して簡單で、シユンプラー教授の回教國史の卷末に計十頁の Schrifttum がついてゐる以外は、文中又は脚註にスタンダードワークスの注記がある

のみである。

これに對し、最新の研究論文や著書の紹介を主としてゐるのは同くケルソンの學者たる Wissenschaftliche Forschungsberichteの精神科學部門 (Geisteswissenschaftliche Reihe) の東洋學篇である。この叢書はホムン (K. Höm) 教授の編輯で、全二十一冊、一九五四年までにその中の十冊が刊行されてゐる。東洋學篇は第十九・二十・二十一の三冊である。

19. Orientalistik I: Sinologie, dargestellt von Prof. H. Franke, München, 1953, 216 S.

20. Orientalistik II: Der Vorderer Orient im Altertum, dargestellt von Prof. O. Krickmann, Freiburg. i. Br. (未刊)

21. Orientalistik III.: Der Vorderer Orient in islamischer Zeit, dargestellt von Prof. B. Spuler, Hamburg, und Prof. L. Forrer, Zürich, 1954, 248 S.

發行所はベルリンの A. Francke AG. Verlag である。この中、フランク教授の支那學は、支那學研究のあらゆる分野に互つて一九三五年以後の研究の内容と書誌とを擧げたもので、該博な知見を綜合した力作である。しかし本文では支那學を扱ふのが目的ではないので、これについては深く觸れま

す。第二十一冊は即ちシェンブーラー教授とフォルラー教授一表紙等には Dozent an der Universität Zürich であるが、他には教授としてゐる。恐らく教授の資格をもつてゐる人で、あうーとの共編になるイスラム時代の近東史研究概観である。フォルラー教授がオスマン帝國とトルコ共和國の部分を擔當し、他はすべてシェンブーラー教授が執筆してゐる。その目次を擧げると、次の如くである。

(イスラム時代の近東(北アフリカを含み、トルコを除く)  
(S. 9—191)

序論

歴史參考書 年代關係參考書 言語學關係參考書

地理

歴史的旅行記

歴史

宗教史 イスラム イスラム法 キリスト教 ゴロアス

ター教

一般史

社會經濟史 經濟 行政

政治經濟生活上の個人(個人の研究及び傳記)

軍事史及び戰爭史

歴史研究の補助學

貨幣研究 年代學

文學 アラビヤ文學 ペルシヤ文學 中亞のトルコ文學

哲學

音樂

自然科學

醫學

研究史

補遺

(イ)オスマン帝國及びトルコ共和國 (S. 193—233)

帝國史

地方史

社會經濟史

補遺

この中、(一)の序論の中の歴史參考書と云ふのは、一般書誌と研究史との兩方で、(一)の最後の研究史とは必ずしも明瞭な區別がない。

この書の最大の特色は第二次大戦勃發以後の研究を網羅してゐる所に在る。言ひ換へると、本書は第二次大戦以後の研究の紹介をその目的としてゐるのである。しかも著者等の博搜なる、英・獨・佛・伊・米は申すに及ばず、ロシヤ・ポーランド・ハンガリー等全歐米の學者の業績を漏れなく収録し

てゐるばかりでなく、エジプト・アラビヤ・ペルシヤ・トルコ・インド等主要回教諸國に於ける出版物をも出来る限り記載することに力めてゐる。私はフォルラーについては知る所がないが、シラユーパーについてはその多くの著作を通じて富瞻博洽なる知見に讃嘆を惜まない者である。本書の如きは、誠にこの著者にして始めてよくし得る所であらう。

なほイスラムについては、その中世學術史への偉大なる寄與を讀へてアラビヤ人の優秀性を強調し、ルナン以來のアラビヤ人の能力の過少評價をたしなめ、回教國家の將來に於ける飛躍的な發展を希望するサートン (G. Sarton) の講演 (Incubation of Western Culture in the Middle East, Washington, 1951)、イスラムと歐洲の歴史との密接な關聯性を説いたルウイヌ教授の論考 (B. Lewis Islam, in *Orientalism and History*, Cambridge, 1954, pp. 16—33) 等は、イスラムの文化の本質に觸れてゐるもので、初學入門の徒は申すに及ばず、この方面に興味をもつ者の一讀すべき文字であらう。

最後にアルフォンス II ガブリエル氏のペルシヤ研究史 (Alfons Gabriel, *Die Erforschung Persiens. Die Entwicklung der abendländischen Kenntniss der Geographie Persiens*, Wien: Verlag Adolf Holzhausens NfG, 1952,

VIII, 359 S. mit 30 Abbildungen und 7 Karten) を擧げて、この稿を終らう。本書はその副題の示す如く、ヘルシヤの地理に關する歐人の知識の發達を詳細に考へたもので、文献を通じてのヘルシヤ研究でなく、實際にヘルシヤの土を踏んでの研究を記してゐる。従つてヘルシヤに入つた主要旅行者の足迹、地理・地質・資源調査を目的とした最近代の學者の業績、並びに考古學的調査等が、畧・餘す所なく記述されてゐる。第一部・第二部の二つに分れる。第一部はギリシヤ人及びローマ人の時代から十八世紀までを、第二部はイギリスとフランスとの勢力争ひから一九四〇年代までを扱つてゐる。就中、一番我々に參考になるのは第二十八章「現代のヘルシヤ研究」で、第一次大戦後から一八四二年頃までの各國學者の活躍を記し、ヘルツフェルト (E. Herzfeld)・スタイン (Sir A. Stein)・ギルシマン (R. Ghirshman)・ブルヌ (T. J. Arne) 等、我々に親しい名がいくつも出てくる。著者カプリエル自身、一九二八年から一九三七年までその夫と共にルート (Luz) 地方の調査に従事してゐる。ここで著者はマルコ・ポーロの行路を述べるのであるが (S. 305) それによつてマルコ・ポーロの記事に特に新しい解釋が加へられた様子はなひ (S. 32—42)。要するに一つの編纂物であるから、既刊の研究書や紀行の抜き書で、筋書を讀む感じがするけれど、

とも、更に個々の學者の業績について深く研究する場合の手引きとしては或る程度役に立つてゐらう。

- (1) 羽田明氏の紹介がある (遊牧民族の社會と文化三〇一—六頁)。
- (2) 和田久徳氏の紹介がある (史學雜誌六三卷六號)。
- (3) 石田幹之助氏の紹介がある (東方學第八輯一四一—一四三頁)。
- (4) 但し私の讀み方が杜撰なためか、次のものは引かれてゐないやうである。

- Gannal el-Din el-Shayyal: A Sketch of Arabic Historical Works published in Egypt and the Near East during the last five years (1945—50). Proceedings of the Royal Society of Historical Studies, 1. Cairo, 1951. pp. 143—174 (本書十二—十三頁に入る)。
- Umberto Rizzitano, Studi di storia islamica in Egitto (1940—1952). Oriente Moderno, XXXIII, 1953, pp. 442—456 (本書一十七頁に入る)。
- A. J. Arberry, The Cambridge School of Arabic. An Inaugural Lecture delivered on 30 October 1947, Cambridge 1948 (本書一七五頁に入る)。
- B. Lewis, British Contributions to Arabic Studies, London 1941 (同右)。
- H. Bowen, British Contributions to Turkish Studies, London 1945 (同右)。